

## 編集後記 時代をつなぐ幸せのバトン

表紙の写真は縁結びの神様として有名な出雲大社の白ウサギ。

その「因幡の白ウサギ」の話が記された古事記ですが、イザナキとイザナミによる**国生み**の神話も有名です。黄泉の国とこの世との境界で、2人は言い争いをします。イザナミは、「あなたがこんなことをするなら、この世の人間を一日で千人殺してやる！」と言い放ち、「それなら私は、一日に千五百人生もう」とイザナキは返しました。この神話によって毎日500人ずつ人口が増える国となり、以後、わが国は繁栄することになったといえます。

アヴェニール労務事務所 所長 柿野元博

<http://www.avenir-sr.jp>

E-Mail [avenir4you@gmail.com](mailto:avenir4you@gmail.com)



12月2日の日経新聞によると、日本の出生数が急減し2022年の出生数は初めて80万人を下回る見込みとのこと。想定を上回る今年の出生減のペースを松野博一官房長官は、「**危機的状況**」とまで表現しています。少子高齢化による影響は、労働力の減少と経済成長の阻害等多岐にわたります。とりわけ社会保障の問題です。公的年金制度は、**現役世代が納める保険料でその時々の高齢者世代に年金を給付するという仕組み**となっています。つまり、現役世代が**将来受け取る年金は、その子どもや孫たちの世代が納める保険料でまかなう**ということになります。自分が納めた保険料が積み立てられ、将来自分に年金として戻ってくるわけではありません。

一方、日本人の平均寿命は昨年コロナの影響で前年を下回ったとはいえ、長い目で見ればこれからも延びていくと予測されています。つまり、もし65歳で仕事を辞めてそのまま働かないということは、社会のお世話になる期間がどんどん長くなっていくということ。絶対数が減っていく子どもや孫たちの世代の負担が重くなっていくということです。( >\_< )

「働けなくなった時、国が手を差し伸べなければいったい誰が助けるのか」と福祉国家の基礎を固めたとされるのが元総理大臣の故・田中角栄氏です。

その田中角栄氏は、「**駕籠に乗る人、担ぐ人、そのまたわらじをつくる人**」という言葉を好んで使ったといえます。駕籠に乗っている人は、かつぎ手や（直接会うことのない）駕籠を作る人やわらじを作る人に支えられて、それではじめて自分も生きられる。私たちは一人だけで生きているのではなく、多くの人の見えない縁によって生活を成り立たせることができている。それが「社会」というもの。

1950年頃の東京を舞台に描いたアニメ「サザエさん」に出てくる「波平さん」は54歳。でも54歳には見えませんよね（失礼!）。「波平理論」を提唱する日本銀行の関根敏隆調査統計局長は、波平さんは「生物学的に現在の74歳に相当」するとしています。日本人は生物学的に当時よりずっと若くなっているのです。

子どもや孫の世代の負担を減らしたいのなら、できるだけ長く健康でいて無理のない範囲で、わらじを作ったり駕籠のかつぎ手になる覚悟が必要なのかもしれません。その為には、65歳を超えても何らかの形で、自分の経験が生き興味の持てることで働き続けるキャリアプランを、一人一人が若い頃から考える時期に来ているように感じています。そして働けなくなったら、堂々と駕籠に乗ってもらいましょうね。(^^)/

日本には「縁起」にまつわるものが多くあります。「縁起もの」には自分が幸せになりたい、家族やまわりの人を幸せにしたいという想いが込められているように思います。それは、今とは比べ物にならないくらい、生と死が隣り合わせの時代を生きてきた**先人たちの「幸せ」に対する想い**です。

「縁起もの」というものは先人たちが**幸せに対する想いをつないできたバトン**なのかもしれません。

年越しそばを食べて、お正月には年末についたお餅を食べ、おせちをいただく。

いろんな具材があるおせち料理なんて、そんな幸せのバトンが溢れていると思いませんか。

そう考えると、数の子も海老も蓮根も黒豆もゴボウも…一段と美味しく感じるかもしれませんネ。(^^)

僕たちは次の時代にどんな**幸せのバトン**をつないでいけるでしょうか。



元阪神の金本選手や菊池桃子さんと  
同じ年なのだよ



ゴメンやけど



みんなが喜ぶ  
昆布巻きだよ



おせち料理は  
幸せのバトンの  
宝宝箱だよ

